

## 第5分科会テーマ

「これからの時代に求められる社会教育委員と公民館運営審議会委員の役割」

### 川内村における里山学の体系化と継承の取組み

川内コミュニティ未来プロジェクト協議会事務局長 佐原禅

#### 1 はじめに

震災以降、川内村ではコミュニティの維持のためさまざまな努力を重ねてきました。交流人口や移住者の増大においても施策を積み上げてきました。それらをさらに加速するために、住民目線での地域づくりがとても大切だと考えます。

本プロジェクト協議会は、村内外の有志が集まり、教育や交通・流通の仕組みづくりに向けて2017年7月から動き出した団体です。「幸福感をもてる村づくり」を目指して活動しています。真っ先に重要だと考えたことが、若い世代が「川内村を自分のふるさとと思い、未来に渡り受け継いでいきたい」という思いを持つことです。若者がそう思えるよう育てていくことが大切です。学校や家庭における教育がその役割を担っていることは認識しつつ、川内村独自の体験や仲間同士の助け合いが育まれる機会を作り、やがて村を巣立ち、または住み続ける子供たちが「川内村がふるさとでよかった（コミュニティ・アイデンティティ）」と実感できることを目指します。

#### 2 具体的な取組み

本プロジェクト運営委員メンバーは月に一回の運営会議を開き、目的や手法などの検討を行っています。古き良き川内と子供の将来を豊かにする要素を抽出し、川内村に元来あるものを通じて、「興味を持つ（興育）」「郷を知る（郷育）」「響き合う（響育）」を主な柱に捉え、有識者の助言を得つつ、人間的に豊かな川内っ子を育むプログラムを展開しています。

村民主体を前提とするため、地域住民を集めての意見交換会（井戸端会議と呼称）を開催し、小中学校生徒へのアンケート（故郷への意識調査）を実施し、そこから得られた課題や要望を基に有識者を交えてプログラムの策定・体系化を行い、「質の高い原体験」に触れることができる環境を創出しています。

体験の場は「ふるさと学校（主として子どもが川内村の風習や生活の知恵を体感する場）」や、「川内学習会（村民が地域について再認識するために第三者の風俗研究者等から学ぶ場）」等を開催し、村民が故郷を愛しみ残していきたいという風潮を醸成することを目指しています。

#### 3 活動等の成果

「川内村には遊べる山がある」「自分の地域にこんな楽しみ方があったのか」「残していきたい地域の文化に気がついた」これらは今まで開催してきた「ふるさと学校」や「井戸端会議」などで実施したアンケートから得られた、子ども達や大人の声です。逆を言えば、

地域の子ども達は東日本大震災・原発事故を背景としつつも、「山で遊べなかった」「地域資源の楽しみ方を知らなかった」「残すべき文化を意識したことがなかった」と見ることができます。まずそのことをプロジェクト実施者として認識できたことが成果の一つと考えます。

その上で、我々は「地域とは何か」を考え、子ども達に直観的に分かり易く、楽しみながら、継続的に伝えていくことの重要性を体感することができました。イベントの回を重ねるごとに新しい発見があり、開催を熱望する方が現れ、プロジェクトに参画したいという地域の方が生まれることで、活動の幅が広がり、地域への思いや理解が深まりました。

#### 4 今後の課題

現在の取組みを「単なる体験の機会にしない、地域住民が主体的に継続していく仕組み」にしていくためには、川内村民の何らかの形での参画が不可欠だと感じています。川内村であっても、利便性を追求する現代社会の生活様式は都市部と同様です。そのような中でも日常の生活に、川内村の自然や文化、習慣、知恵が溶け込み、自然な形で親から子に継承されていくためには、村民自らが地域を知ることや、伝え残していきたいという思いを持つことが肝要であると考えます。

そして、現在我々が行っている「人為的」な取組みが、「あたり前」の川内スタイルになるように指向していきたいと思えます。